

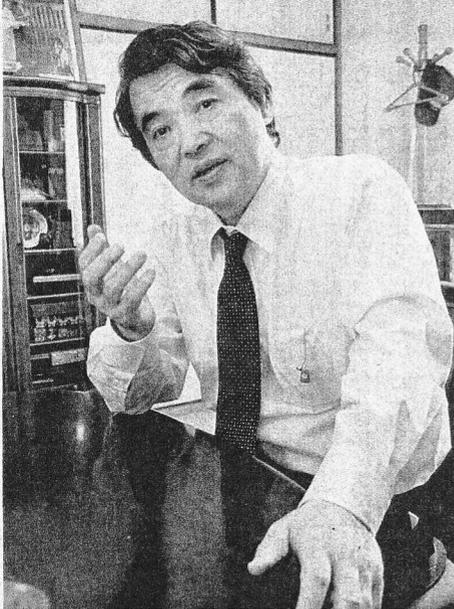
ネパールで南海トラフ地震見据え

4月25日に起きたネパールの巨大地震で、国際医療NGO「AMDA」（北区伊福町3）は発生直後から現地での支援活動にあたった。AMDAグループの菅波茂代表（68）は出発前、「南海トラフ巨大地震を意識して活動したい」と話していたが、山岳部という対照的とも思われる地域での支援活動が、南海トラフ地震とどうつながるのか。菅波さんが今見据えていることを聞いた。【五十嵐朋子

見聞録 @

AMDAの菅波代表

AMDAは、地震が発生した翌日の4月26日から約1カ月間、けが人などの医療にあたる「緊急救援」を実施。日本から職員や、全国の有志の医師らで作るチーム述べ約20人を派遣し、ネパール人医師らで作る「AMDAネパール支部」などと一緒に支援にあたった。現在は、被災者の心のケアや時間がたつてから現れる症状に対応する「復興支援」に重点を移している。



「ネパールでは、南海トラフ巨大地震を意識して支援活動にあたった」と語るAMDAグループの菅波茂代表（北区伊福町3）のAMDAで

孤立地域支援の経験に



地震に襲われたネパールで、崩れた土砂を手作業で処理しようとする人たち
＝AMDA提供

日後に入った村では、重くなったという。菅波手作業で土砂などをかさねながら山道を進んでようやくたどり着くなら、四国が孤立した。菅波海側を経由して国外からの支援があった時には、受け入れやすい。菅波さんは「本州と四国をつなぐ橋が通行できなれば、四国が孤立する。海外メディアや支援団体は大都市に集中するかもしれない」と予想する。実は、AMDAは南海トラフ地震に備え、四国を支援するための仕組みづくりの既に着手している。その一つが自治体などの連携だ。AMDAは2013年に総社市、県立大（同市）と災害時の支援活動などで協力し合う三者協定を結んだ。同市は津波被害の心配がない上、高速道路があり交通アクセスがよい。菅波さんは「日本

「次の災害への準備活動を」

いた。食料を配ると、「村は、週間孤立していた」と村人に喜ばれたという。他国の支援チームから「崩れた山の向こうにある集落の様子が見えない」という焦りの声も聞いた。近い将来、発生が予測される南海トラフ地震では、関西から九州まで太平洋側の幅広い地域が震源域となり、大規模な土砂崩れも起きると想定されている。菅波さんにとって、ネパールの光景が四国の山あいの地域に



ネパールでけがをした被災者を治療するAMDAチーム
＝AMDA提供

物資を集積することもできる」と指摘する。北区のAMDA本部が被災することも想定し、総社市に拠点を設け、各国からの支援を受け入れたい考えだ。「瀬戸大橋が通れない場合、船をしようするか」「道路情報はどこから得るのか」。菅波さんはさまざまな事態を想定し、民間企業や自治体と幅広く協力体制を築こうと模索している。香川県丸亀市や高知県、徳島県などとも同様の連携協定を結び、今月には四国で、災害発生時の連携をテーマにした話し合いも予定しているという。菅波さんは「他国での活動も、次の災害への準備段階と位置づけて経験を積みみたい」と話している。